慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの価値論に就いて（二）
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.7 (1919. 7) ,p.899(97)- 910(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190701-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り買入るゝ石炭運賃よりも割安に付く有樣なり然るに我國の民間會社に在りては鑛、炭、船舶等の全部を所有するもの無く、又此の何れか一つを所有するものさへ極めて尠なき有樣なれば原料運賃共に市場の浮沈に左右せられ且つ使用數量に對しても少しも安定を得る事無し、若し原料が會社の所有鑛山より出で而して其の鑛山が手近かに所在すれば尙ほ以て便利なる譯なれども、例令遠隔の地に在るとも會社所有の鐵道若くは船舶に據りて運搬する事を得ば所有鑛山が手近かに所在する場合と經濟上大なる相異あらざるなり、我が製鐵會社にありても其の工場の所在地に依りては內地にて鑛石又は石炭若くはコークスを買入るゝに比し蘭領のセレベスより鑛石を買ひ西比利亞より石炭を貰ふ方却て割安なる事あり、斯の如き有樣なるを以て原料を得る場所は隔り居るとも供給量に對する安定と運賃市場に左右せられざる事とが生產費を低下せしむるに就きて必要なるは論を俟たず、

我が製鐵業の生產費が海外のそれに比して高價に當り不利益なる事情は大要左の通りなるが唯だ我國は比較的水力に富み、水力電氣を利用し得るの地位に居るが故に電氣製鐵に於て相當の便宜あるべく思はる、即ち水力電氣を旺んに製鐵に應用する事にならば我國の石炭の消費は著しく減ずるに到るべし、我國には今日迄の調査に據れば水力電氣を起し得べき水力は約四百萬馬力あるが尙ほ十分に調査せば或は五百萬馬力に達せんも知れずと云ふ今若し此の四百萬馬力の半ばを製鐵に使用する事を得ば、一ヶ年六百萬噸の鐵を造り得らると云ふ、而して此の場合に於ても勿論石炭を多少は使用せざるべからざるも、其の量は普通骸炭銑鐵を造る場合に比し三分の一にて濟む譯なるが故に歐洲全體にて水力の使用し得べきものが四千萬馬力なりと云ふに我が日本が一ヶ國にて斯かる多量の水力を有し居る事は實に我國の天惠と云ふべく、斯の如き天惠を有する我國に於て今後大に水力電氣製鐵事業を旺んならしむる事は大切なる時務に屬すべし。

要するに現在彼我の生產費に於て既に擧げたるが如く、銑鐵の生產費は我國の九に對し海外製鐵會社は六に當る位の相違ありと雖も之れ即ち原料其の他の條件に對する相違にして若し我が製鐵會社が此等總ての條件を改良するに至らば外國製鐵會社の生產費位に引下げ得らるべく運賃關稅を負擔する輸入外鐵に對し競爭上有利の地位に立つを得べしと雖も製鐵上の總ての條件の改良は大に資金問題を伴ふ譯なり、即ち舊式の設備を新式のものに變更するも、鑛山、炭山を所有するも、將又、鐵道を布設し船舶を所有するも熔鑛爐の規模を大にして石炭若くはコークスの使用量の節約を計るも、コークスの副產物を得るも、若くは水力電氣を利用して製鐵するも、總てが資本問題の解決に俟つべき案件たり、然るに原料の供給、技術、生產費等の點に於て經濟的に存立の覺束なき現在の我が群小製鐵業者が現狀維持の儘にて推移せんとせば今後非常に不利益の狀態に陷るべきは想像するに難からざるなり。

アダムスミスの價値論に就いて（二）

加田忠臣

一、スミス價値論の要領（前號所載）
二、スミス價値論の本質（本號所載）

三勞働價値說の勞働の性質

（八）

前段叙述するが如く、スミスは自然價格は生産費に依つて決定せられ、市場は財の需要と供給との關係によりて定まり、而して市價は完全なる自由競爭の存する場合に於ては、自然價格に一致すとなせり。而して生産費の内容として勞銀、利潤並に地代を掲げたり。

扨てスミスは其價値論の出發點に於て

The value of any commodity, therefore, to the person who possesses it, and who means to use or consume it himself, but to exchange it for other commodities, is equal to the quantity of labour which it enables him to purchase or command. Labour, therefore, is the real measure of the exchange value of all commodities.(1)

又は、

The real price of everything, what everything really costs to the man who wants to acquire it, is the toil and trouble of acquiring it.(2)

と言へるが更に第一卷第六章に到りては

In that early and rude state of society which preceedes both the accumulation of stock and appopriation of land, the proportion between the quantities of labour necessary for acquiring different objects seems to be the only circumstance which can afford any rule for exchanging them for one another.(3)

と言ひ、資本私有制度の時代に於ける價格決定の原因に就きては、

In this state of things, the whole produce of labour does not always belong to the labourer. He must in most cases share it with the owner of the stock which employs him. Neither is the quantity of labour commonly employed in acquiring or producing any commodity, the only circumstance which can regulate the quantity which it ought commonly to purchase, command, or exchange for.(4)

なりとし分業發達し私有財産制度の確立せる時代の價格決定に就きては、

Wages, profit, and rent, are the three original sources of all revenue as well as of all exchangeable value.(5)

と言へるが如き以上の文章を比較考察する時は其間主張の一貫を缺くが如き觀なきにあらず。例へばスミスは其價値論の最初に下せる「勞働の分量は價値の唯一の決定原因なり」とせる命題に顯著なる制限を加へ或は之を全然否定せるが如き觀あるなり。又、國富論第一卷第六章のみを見るときは、スミスは進歩せる交換經濟の時代に於ける價格の構成要素が勞銀、利潤並に地代の三者に存せりと說けるも、一方に於て價値は當然勞働によりて決定せられ、利潤並に地代は勞働に依りて增加せられたる價値を掠奪せるものに外ならずと看做せりと解し得られざるにも非ず。されば吾人は其の何れに往くべきや適從に苦まざるを得ず。

されど靜かに、國富論を熟讀するときは、吾人はスミスの眞意の那邊に存ずるやを推斷し得べし。スミス論じて曰く「勞働の生産物は勞働の自然的報酬即ち勞銀なり。土地の私有と資本の蓄積なき原始草昧の時代に於ては、勞働の全生産物は勞働者に歸屬し、勞働者は其生産物を分つべき地主又は資本家を有することなきなり。この狀態にして繼續せば、勞銀は分業の發

達に從ひ生產力が增進する每に增加すべし」と。[6]

即ち交換價値の發生は獨り、勞働によるものにして、土地と資本との私有制度が勞働の增加せる價値を割取するを示せるなり。されば其意はデビッド・リカルドが Principles of Political Economy and Taxation 1817 に於て

The value of a commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its production, and not on the greater or less compensation which is paid for that labour.[7]

と言へる交換價値の原理と同意味のものにして余はスミスが其價値論の原理としては勞働價値論を採れるものなりと信ずるなり。以下其理由を述べんとす。

（註一）Smith: Wealth of Nations. vol. i. p. 32.
（註二）Smith: loc. cit.
（註三）Smith: op. cit. vol. i. p. 49.
（註四）Smith: op. cit. vol. i. p. 51.
（註五）Smith: op. cit. vol. i. p. 54.
（註六）Smith: op. cit. vol. i. p. 66.
（註七）Ricardo's Works 1852. p. 9.

（九）

「勞働が富の父並に發動的元質たること、宛も土地が母たるに同し」[1] "Labour is the father and active principle of wealth, as lands are the mother" とせる思潮はウヰリアム・ペテイ、ジョン・ロックの時代より其源を發せるものにして英國經濟思想の根底をなすものなり。スミスも亦この思潮より脫する能はず、彼は其大著の開卷第一頁に曰へらく

The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with all the necessaries and conveniencies of life which it naturally consumes, and which consist always either in the immediate produce of that labour, or in what is purchased with that produce from other nations.[2]

と。一國民の每年の勞働が其國の年生產の淵源なりてふ這般の傳統的思想は、スミス經濟學體系中を流るる思想の最も重要なるものの一にして、彼が實にフイジオクラアトの農業偏重論より數歩を進めて經濟學の新しき境地を開拓せる所以の一なり。而して斯くの如き勞働の觀念と共に其實際的方面に於て勞働者階級に對して、スミスが深き同情を有せしは、國富論第一卷第八章勞銀論並に第一卷第十一章地代論の末尾に於て社會の利益と所得の分配との關係に就きて論せし所に依りて明かなり。斯くの如く勞働を重要視するはスミス經濟學の一特徵にして、吾人が彼の經濟學を論ずるに當り、記憶するを要する所なりとす。

スミスの師友たりしデビット・ヒユームが其大著 Essays, moral, political, and literary 中の商業論に「此世のすべてのものは勞働に依りて購はる」[3] "Everything in the world is purchased by labour" と言へるに倣ひて、スミスは

"What is bought with money or with goods is purchased by labour, as much as what we acquire by the toil of our own body. ..... Labour was the first price, the original purchase-money that was paid for all things."[4]

と言へるが「勞働はすべてのものに對して最初に支拂はれたる代價即ち最初の代金なり」とせるは實に英國經濟學の傳統的根本思想なると共に、スミス經濟學の根本思想たるなり。

（註一）Sewall: Theory of Value before Adam Smith. p. 10-11.

（註二）Smith: op. cit. vol. i. p. 1.

（註三）David Hume. Essays and Treatises on Several Subjects. 1809. vol. i. p. 277.

（註四）Smith: op. cit. vol i. p. 32.

（十）

土地と資本との私有起らざる時代にありて、勞働が價値決定の唯一の原因なるは、スミスの明かに論ぜし所なり。[1] 資本私有制度の時代にありては、スミスは先に余の引用せる

"Neither is the quantity of labour commonly employed in acquiring or producing any commodity, the only circumstance which can regulate the quantity which it ought commonly to purchase, command, or exchange for.[3]

なる章句に依りて明かなる如く、決して勞働を以て唯一の價格決定の要素となさざりしが如し。されど吾人がこの文章より前の文章を見るときは資本が價値を增加するにあらず、たゞ勞働のみ價値を增加する所以を知るを得べし。スミス曰く、

"In exchanging the complete manufacture either for money, for labour, or for other goods, over and above what may be sufficient to pay the price of the materials, and the wages of the workmen, something must be given for the profits of the undertaker of the work who hazard his stock in this adventure. The value which the workmen add to the materials, therefore, resolves itself in this case in two parts, of which the one pays their wages the other the profits of their employer upon the whole stock of materials and wages which he advanced."[3]

と。余がアンダー・ラインを施せる部分は最も重要にして、其意は資本私有制度の起りてより、其私有制度の爲に勞働の增加せる價値より利潤なる名目の下に、其一部分が割取せらるゝと言ふにあり。換言すれば價値の增加は其根據を何れの時に於ても勞働の上に置くも資本私有制度が價値の分配に對して變化を起せりと言ふ意なり。

地代の場合に於ては以上の如き意味が最も適確に表はさるゝなり。スミス曰く、

"As soon as the land of any country has all become private property, the landlords, like all other men, love to reap where they never sowed, and demand a rent even for its natural produce. ..... He (labourer) must then pay for the licences to gather them; and must give up to the landlord a portion of what his labour either collects or produces.[4]

と、其意は土地私有制度の起りし爲めに、勞働者は、其土地使用料として地主に對し地代を支拂はざる可からずと言ふに在り。

スミスの所謂原始草昧の時代にありては、資本（器具）が使用せらるべきはリカルドの言へるが如し。[5] されどこの場合に、利潤の起らざるは、社會關係が資本の私有を必要とせざればなり。斯くの如き關係は土地に於ても之を見るを得べく、利潤と地代とが私有財產制度の結果起れるものにして、之が勞働の增加せる價値を掠奪するに過ぎざるを示すものなり。スミスはこの狀態を以て自然なりとせるには相異なけれども、其掠奪なることに至つては、之を打ち消さず、價値の增加は原始草昧の時代に於ても文明の域に達せる社會に於ても明かに勞働に依るとなせるなり。

斯くの如き推定は國富論第一卷第八章勞銀論と、其意は土地私有制度の起りし爲めに、勞働者は、其土地使用料として地主に對し地代を支拂はざる可からずと言ふに在り。

を讀むに依りて、一層明快に證明せらるるなり。

「勞働の自然的報酬即ち勞銀は勞働の生産物より成るものとす。

「土地の私有、資本の蓄積なき原始的狀態にありては、勞働の生産物は、勞働者に歸屬し、之が配分に與かるべき地主又は雇主あるを見ざるなり。

「されど勞働者が其勞働の全生産物を享受するが如き原始的狀態は、土地私有と資本の蓄積の行はるるや直ちに消滅するなり。……而して、土地の既に私有財産と爲るや、直ちに地主は勞働者が其土地より生産し又は採拾し得べき殆んど一切の生産物に向つて其の配分を受けんことを要求するに至るべし。故に土地に投ぜらるる勞働の生産物より第一に控除せらるるものは地代なり。而して、土地を耕耘する者が其收穫を了するときまで、自力にて其生活し得ることは甚だ稀にして、其生活資料は概して雇主たる農家の資本中より前貸せらるるなり。而して雇主は、勞働者の生産物を受くるにあらざれば、換言すれば、彼の資本が利潤に依つて補償せらるるにあらざれば、彼は勞働者を雇傭するの意志を有せざる可し。さればこの利潤は土地に投ぜられたる勞働の生産物より第二に控除せらるるものなり。[6]」

以上引用せる國富論の數節はスミスの價値説が勞働價値説に外ならざることを證明するものなりと云ふを得んか。[7]

（註一）Smith: op. cit. vol. i. p. 49.
（註二）Smith: op. cit. vol. i. p. 51.
（註三）Smith: op. cit. vol. i. p. 50.
（註四）Smith: op cit. vol. i. p. 51.
（註五）Ricardo's Works. p. 16.
（註六）Smith: op. cit. vol. i. p. 66-67.
（註七）ボヒーム・バヴヒルクはスミスの資本利潤を論ぜる所に於て利潤の原理に關しては二個の方面ありと言へり。其一は余の指摘せる勞働者総取説にして、其二は資本家の利己心に訴へて、資本を投資せしむべき爲めの利潤なり。而して第二の説を以て、Senior が後に説ける節約説とも見るべきものとし、スミスの態度は兩者の間に完全なる中立を守りたるものとせり。（Böhm-Bawerk: Capital and Interest. Trans. by. Smart p. 71-75）

されど余はスミスの説が完全なる中立説なりとするボヒームの説に贊同する能はざることキヤナン教授と同じ。教授曰く

"We may say, then, that to Adam Smith profits appeared to be a deduction from the produce of labour, to which the labourer has to submit because he has no means of support, and no materials of production. Dr. Böhm-Bawerk believes that Adam Smith also occasionally advanced another theory, to the effect that profits are an addition to the price of the produce of labour, but the passages he quates scarcely prove the existence of his theory.

(Edwin Cannan: A History of Theories of Production and Distribution. 1st Ed. p. 202 and also note (2) on the same page.)

と。洵に教授の言へるが如く、スミスの説の眞意は勞働者総取説にあるは以上の章句によりて明かなり。

又スミスの價値説が勞働價値説にして、其結果スミスが勞働者総取説を採り、彼よりリカルド並びにカアディアン・ソシアリストの學説を經てカアル・マルクスに至りて其の學説が大成せられたりとなすは社會主義者の見解なるが如し。（John Spargo: Socialism. 1913. pp.205-6, 215, 242-244）

（十一）

スミスの價値論を論ずるには、二つの見地よりせざる可からず。其一は生産行程に於ける價値にして、其二は分配行程に於ける價値なり。生産行程より價値を見るときは其財に投用せられたる勞働によりて其財の價値は決定すとなす

にあり。價値の發生は生産に投ぜられたる勞働によるものにして勞働に對して支拂はるる代價によるにあらずと主張するなり。かゝるスミスの說を解釋してリカルトが

"The value of a commodity, or the quantity of any other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its production, and not on the greater or less compensation which is paid for that labour."(1)

と言ひ、アンダー・ラインを施せる部分を更に解釋して

"Labour of different qualities differently rewarded. This no cause of variation in the relative value of commodity."(2)

とせるは、スミスの學說を解する上に於ては正確なり。然るにスミスの用語上の不注意は勞働の量と之に對して支拂はるる勞銀とを混同せるものの如く、爲めに吾人が先に記せるが如き矛盾を其所論中に發見するに到りしなり。

第二の分配行程に於ける價値は價値の發生とは何等の關係なき現象なり。以上論ぜる所によりて利潤と地代とか價値發生の原因にあらず、たゞ私有財産制度の下に於てのみ、發生する現象なるを知れり。故に分配行程に於ける價値は勞働によりて發生せる價値が社會の諸勢力の間に其權力關係上によりて分配せらるを示すものなり。而して、アダム・スミスの所得分配論が其價格論中に於て論ぜらるるの一事は價格と分配とが大なる關係あるを示すものにして、之が價格論中に論ぜらるる理由は、價値發生を論ぜる部分の後を受けて、其發生せる價値が如何に分配せらるるやを知るを要するが故なり。

（註1）Ricardo's Works, p. 9.

（註2）Ricardo's Works. p. 14.

（十二）

余の有する此見解はスミスの價値論を以て勞働價値說、費用價値說及び需要供給價値說の三者を認容せるものとなしスミス經濟學系統に於ける其重要を同一視せんとする學者の所說とは其根底に於て異なれるものなり。

フォン・ウキザーは其著「自然價値論」に於てスミスの價値說に就きて曰く、

"It has been said that one finds in Adam Smith nearly all the explanations of value which have ever been attempted. What is certain is that, in his explanation, Adam Smith has put togather two views that contradict each other. To put it shortly: he gives two theories, one philosophical, the other empirical."(1)

と。ウキーザーに依れば、スミスの價値說は二元的にして、其一は哲學的、其二は經驗的なり。哲學的見解に於て、スミスは第一に價値の特質的屬性の性質を研究し、價値は屬性其ものなるを斷定せり。かゝる斷案に達するに、スミスは日常の經濟生活のすべての複雜なる要素を除却し去り、單純原始的なる自然的狀態を觀察するによりて、價値の發生が全く勞働の分量なる費用に依つて決定せらるるを見たるなり。されどかゝる哲學的見解より獨立して彼は經濟生活の實狀を見て、其經驗的見解に達し、價値は利潤地代並に勞銀の三者によりて構成せらるるを見たるなり。(2)

かゝる二元的解釋はスミスは果して、何を意味せるやの問題に遭遇するとき直ちに困難を感ず。スミスは哲學的見解を是とせしか、經濟的見解を是とせしか之れ問題たらざるべからず。ウキーザーの解釋は巧妙なりされど彼はスミスが國富論第一卷第六章の始めに言へる原始草味

の時代でふ點を力説して、後の時代に於ける價格の現象が勞働によりて、增加せられたる價値を分割するに過ぎずとせる吾人の證明せる所を見ざるなり。

ジョン・スチユアート・ミルの如き生産費價値説を主張する論者にありても、其生産費の內容を分解して、其主要なる要素又は、殆んど其全部を構成する費用は勞働なりとして、

"What the production of a thing costs to its producer, or its series of producers, is the labour expended in producing it.....

"The value of commodities, therefore, depends principally on the quantity of labour required for their production; including in the idea of production, that of conveying to market."(3)

と言ひ、殆んどリカルト流の勞働價値説に近きが如きは、スミス價値説の眞意の那邊に存するやを知るの一助たるべきなり。

さればホツイテーカーが

"As a theory of value.....Adam Smith left us an early form of the law of enterpreneur's cost and a labour-command measure of value. But he disowns what is naturally thought of as the genuine classical theory of value, that labour cost regulates market value. This theory was Ricardo's and really his alone."(4)

と言へるが如きは、分配行程上の價値を以て、スミスの眞意なりと解せるによるものにして、決して正當なりと言ふを得ず。スミス價値論の本質は吾人の屢々言へるが如く其勞働價値説にあるなり。

（註一）Wieser: Natural Value. English Translation. Author's Preface. p. XXVII.

（註二）Wieser: op. cit. p. XXVII-XXVIII.

（註三）J. S. Mill: Principles of Political Economy Ashley's Edition. p. 457-458.

（註四）Whitaker: History and Criticism of the Labor Theory of Value in English Political Economy, P. 31.

（未完）

トオマス・ホツブズの政治哲學中に見れたる經濟學説

高橋誠一郎

一

英國に於ける近世的政治思想の表明は正にThomas Hobbes（一千五百八十八年四月五日―一千六百七十九年十二月四日）に始ると稱せらるゝを得可し。實際界に於ける王權を基礎とせる政治的統一及び秩序の確立は又思想界に於ける其反映をHobbesの學説に見出せり。近世的思想に對する推移を確然徵示するものは實に彼が主權に關する近世的學説の透徹明晰なる宣言なり。

彼が意見は英國の大叛亂が將に勃發せんとして、而も未だ發せざりし一千六百四十年を以て成形を有するに至りしが如しと雖（其著De Cive の公にせられたるは一千六百四十二年）、而も彼が最も有名なる論篇Leviathan, or the Matter, Forme, and Power of A Commonwealth Ecclesiastical and Civil. 中に見れる形體に於て表明せられたるは一千六百五十一年にして、實に一千六百四十九年に於ける國王の處刑と一千六百六十三年に於ける議會の處刑との中道に存せるものなりき。即ち彼が政治論は強大なる中央政府の必要が國內の改革若しくは國際的和解の必要よりも遙に緊切に感知せられつゝありし內亂及び共和政時代の混亂裡に成れるものなり。されば斯くの如き危機に際して彼が無政府の害惡に對して鋭敏なる（寧ろ過敏なる）感覺を有し、而して秩序有る狀態に對して寧ろ過當の歸重を爲すに至りしは敢て奇とするに足らざるなり。彼は正に「力は權力なり」との敎義を宣明せる最大なる近世的使徒たりしなり。